

使徒言行録 第13章4～12節

派遣の按手を受けて、伝道旅行に送り出されたバルナバとサウロは、キプロス島のサラミスという町に着きました。そこは、ユダヤ人の偽預言者が働いていた町でした。そこで今日は、偽預言者と対決したサウロの働きから、ご一緒に学んでいきたいと思います。

まず初めに確認したいことは、ユダヤ人の魔術師バルイエスという偽預言者は、7節に記されていますように、地方総督セルギウス・パウルスと交際していたということです。

4年前に殺害された安部元首相の命日が近づくにつれて、犯人であった山上被告の話題がニュースでもたくさん取り上げられるようになってきました。あの事件も、元はというと統一協会という偽の宗教集団が時の権力者に近づいていった結果として起こった事件だとも言えます。時の権力者に近づこうとする偽の宗教団体と、またその力を利用しようとする権力者たちの構図は、今も昔も変わらないのかもしれませんが。ところが、今日の聖書の箇所に出てくる地方総督セルギウス・パウルスは、7節にも記されていますように、賢明な人でした。そこで総督は、バルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとします。ここに偽物と本物の違いが顕著に表れています。偽物の宗教団体は、自らの勢力を拡大しようと、時の権力に近づいていきます。そして、権力者たちも偽の宗教団体の強大な力を借りて自分の権力をさらに拡大させようとするのです。そこにお互いの利益が相まって、いわゆるウィンウィンの関係が生じてきます。ところが今日の聖書の箇所に出てくる地方総督のように賢明な人物であれば、まことの神の言葉を聞こうと、自らバルナバとサウロを招くのです。けれども8節にありますように、魔術師エリマはこの二人に対抗して、地方総督をまことの神への信仰から遠ざけようとしています。これはとても大きな罪なのです。

以前もお話したことがあるかと思いますが、ギリシア語で罪という言葉は「的外れ」を意味する言葉です。弓矢を放ったとき、放たれた矢が的に向かっていくのではなく、的から外れていく。この的は神様を表しています。すなわち、私たちの心や目が的である神様から離れていくこと。これを聖書では「罪」と呼びます。今日の聖書の箇所で、魔術師エリマは、バルナバとサウロを招いて神の言葉を聞こうとしていた地方総督を、信仰から遠ざけようとしています。地方総督の心が、まことの神様の方へと向かないようにすること。つまりそれは、地方総督に罪を犯させるという、とてもたいへんな行為なのです。しかもこの偽預言者は、自分たちが権力者と結びつくことによって勢力を拡大しようとしていた人でした。そのような偽の魔術師に対して、パウロは聖霊に満たされて彼をにらみつけ、こう言います。10節、「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。今こそ、主の御手はお前の上に下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の目を見ないだろう」。こうして魔術師は目が見えなくなってしまふのです。

バルナバとサウロを招いてまことの神の言葉を聞こうとした地方総督を、信仰から遠ざけようとした魔術師。この魔術師は、地方総督を神から引き離そうとしました。すなわち、総督に罪を犯させようとしたのですが、こうやって偽預言者たちはまことの神を権力者から引き離し、自分たちが権力に近づこうとします。けれども、聖書の福音書を見てみると、イエス様は権力者に近づこうとしなかっただけでなく、世の権力によって虐げられている人、貧しい人、病の人、片隅に追いやられている人のところに行かれました。なぜ

なら、その人たちの方が救いを必要としているからです。このように、権力にはびころうとしている偽預言者たちと、そうではなく、むしろ権力によって苦しめられている人たちのところへ赴く宗教とではどちらが正しいのか、火を見るより明かです。今日の聖書の箇所においても、地方総督にバルナバとサウロが会って話をしたのは、彼ら二人が地方総督に招かれたからであり、彼らの方から総督に近づいていったわけではありませんでした。

このようにして、聖霊に満たされたパウロの言葉を受けて目が見えなくなった偽預言者ですが、目が見えなくなるということに関して、ヨハネによる福音書にとっても興味深いことが記されています。ヨハネによる福音書9章1節以下には、生まれつきの盲人をいやされたイエス様の話が出てきます。新約聖書184ページになりますが、ここに出てくる話は、生まれつき目の見えない人に関して、弟子たちがイエス様に尋ねた出来事から始まります。弟子たちはイエス様にこう尋ねます「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」。この当時、イスラエル社会では、生まれつき目が見えないというように、生まれついたときからのハンディがある人や長い間治らない病気がある人は、その人の罪、またはその人の両親が罪を犯したせいでそうなっているのだと考えられていました。私たち日本の社会でも、生まれつきのハンディキャップを負っている人や、あるいは悪いことが続けざまに起こったりすると、何かの祟りだと言って大騒ぎをする人たちがいます。以前、福岡教会にいたときに牧師館の前の道路でよく猫が車に引かれて死んでいたのも、牧師に向かってお祓いをしてもらった方がよいと真面目に話された方がおられました。教会員ではありませんでしたが。イエス様の時代のイスラエルでも、特に人間の内側にある罪のせいで病気やハンディキャップが与えられると考えられていて、イエス様の弟子たちでさえ、そのような社会の常識に捕らわれていました。ところがイエス様は、そんな弟子たちに対してこう語られます。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。罪を犯したせいで何か悪いことが起こるというのは、因果応報的な考え方です。それは、こんなに悪いことが起こるのは、きっと何か原因があるに違いない、と考える人間の悪しき習性のせいです。何か悪いことの背後には、必ず原因がある。そう考える方が、なぜか安心するんですね。原因もなく起こることに対して、私たちはとても大きな不安を感じます。だから、悪いことが起こる原因を探って、ああ自分が罪を犯したせいでこんなことになってしまったんだと自分を納得させることで、解決したような気になる。これが因果応報的な考え方です。それに対して、イエス様はこうおっしゃられます。彼の目が生まれつき見えないのは、彼のせいでも両親のせいでもない。生まれつき目が見えないことに対して、なぜそうなったのかと原因を探って自分を無理やり納得させるのではなく、そんなふうに過去に原因を求めるのではなく、今目が見えないという事実から出発して、そこから未来に向かってこの人の上に神様の御業が現れるように、祈りつつ歩いていくことこそが大切なのだ。イエス様の目は、過去ではなく未来に向かって開かれているのです。

その後、この目の見えない人は、イエス様によって目が見えるようにならせていただきます。その出来事が行われたのは安息日でした。ところが、安息日には不要不急と考えられていた医療行為や治療行為は禁止されていたので、目を癒された彼は、ファリサイ派の人たちによって尋問を受けます。もっとも、目が見えない人が癒される出来事が不要不急の出来事だと考えるのは目が見える人たちの考えであって、目が見えない人にとってはそ

のいやしは一刻も早くなされたいはずです。こうして、目の見えない人が癒されたといううれしい出来事がまわりの人々の喜びには至らず、彼は尋問を受けます。喜ぶ人とともに喜ぶことの難しさを感じます。そして、目が癒された人は、ただその事実だけを語ります。以前、証しの話をした際にも、ただ事実だけを述べることの大切さをお話ししたと思いますが、彼の目が癒されたということはなにごとにも代えがたい事実でした。結局彼を尋問したファリサイ派の人々は、何もできずに彼を外へ追い出します。追い出された彼は、そこでイエス様と出会うのですが、今日の前に見えている人が彼を癒したイエス様だと知ると、彼はイエス様を信じます。すると、イエス様はこう言われました。ヨハネによる福音書9章39節、「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。見える者は見えるようになり、見えるものは見えないようになる」。それを聞いていたファリサイ派の人々は、自分たちのことを言われていると思ってこう言います。「われわれも見えないということか」。するとイエス様はこう言われました。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」。

生まれつき目が見えなかった人には真実が見えていたけれども、自分たちは見えると豪語していたファリサイ派の人々には真実は見えていなかった。今日の聖書の箇所、権力にすり寄っていた魔術師が、神の言葉を求めていた地方総督からまことの神を遠ざけようとしたことに対して、聖霊に満たされたパウロの言葉によって魔術師の目が見えなくなったのは、とても象徴的な出来事でした。そしてもう一つ、聖霊に満たされ、魔術師の目を見えなくさせてしまったパウロ自身も、かつて目が見えなくなったことがありました。使徒言行録9章で、イエス様を信じる人々を牢に入れていたサウロは、さらにダマスコでもクリスチャンを捕まえようと意気込んで出かけていきましたが、その途上、天からの光の中で復活の主イエス・キリストと出会います。そこでサウロは、初めてまことの神を知るのですが、そのときに彼は目が見えなくなってしまいます。そして人々の手に引かれてダマスコに連れて行かれたサウロは、三日間、目が見えず、飲み食いすることもできませんでした。そんなサウロを助けたのが、サウロによって迫害を受けていたキリスト者のアナニアでした。アナニアは最初、神様からサウロを助けるように言われたとき、サウロはクリスチャンを迫害してきたと言って、助けることに反対します。けれども結局、アナニアは主なる神様の命令に従って出かけていき、サウロを助けるのです。このようにして、光の中で復活の主と出会ったサウロは目が見えなくなりますが、人々から助けられ、かつてサウロが敵視していたクリスチャンの手によって助けられます。こうしてアナニアは、目が見えなくなったサウロをまことの神であるイエス・キリストの元へと導いた導き手となったのです。さて、今日の聖書の箇所を見てみますと、地方総督を神への信仰から遠ざけようとした魔術師は、聖霊に満たされたパウロの言葉によって目が見えなくなりますが、11節の後半にはこんなふうに記されています。「するとたちまち、魔術師の目はかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した」。このように目が見えなくなった魔術師を、まことの神の元へと導くアナニアの役割は、いったい誰が担っていくのでしょうか。この魔術師はこれ以降、聖書の中には登場しませんが、このような魔術師でさえ憐れんでくださる神様の御手の中で、すぐれたアナニアのような人物が与えられて、この魔術師も本当に見えるようになること。これこそが、私たちの働きなのだという事を、ご一緒に覚えておきたいと思います。お祈りしましょう。